

シーニックバイウェイ紀南



日本風景街道



主催

シーニックバイウェイ紀南シンポジウム実行委員会

シンポジウム 開催概要

Scenic
Byway
Kinan
Symposium

シーニックバイウェイ紀南シンポジウム

開催日

平成18年
2月11日 (土・祝)

会場

田辺市(小ホール)
紀南文化会館

時間

13:30~16:00
(開場13:00)



▲ウェルカムスピーチに挨拶する真砂田市長。

地域の魅力を道でつなぎ、美しい環境づくりや魅力ある地域づくりを目指す「シーニックバイウェイ」の取り組みについて、多くの来場者が会場を訪れシンポジウムが開催されました。

プログラム

第1部

基調講演

谷口 博昭
(国土交通省道路局長)

パネルディスカッション

●コーディネーター

小田 章
(和歌山大学学長)

●パネリスト

石田 東生
(筑波大学大学院教授)

多田 稔子

(田辺市観光協会連絡協議会会長)

藤本 多佳子

(NPO法人グリーンステージ事務局長)

藤本 貴也

(国土交通省近畿地方整備局長)

<五十音順・敬称略>

交流会

●会場:田辺地域職業訓練センター

●時間:16:15~17:30

第3部

第1部

基調講演

●

谷口 博昭

(国土交通省道路局長)

講演者



身出建設省近畿地方整備局長。1972年入省。2004年、和歌山県建設局長を経て、現職。

日本の高速道路の延長は7300km。全体計画のまだ約6割を超えた程度。

新しい世紀に入ってから5年が経過しました。道路行政においても大きな転換を求められています。現在の道路行政は、原点に立ち戻って見つめ直す「道路ルネッサンス」という時代を迎えていると言えます。道路の持つ価値を新しい世紀に再生して見ることに



▲古代ローマでは約8万kmもの道路(右上写真)が、地中海沿岸に張り巡らされていました。(出典:日本経済新聞「古代ローマと21世紀日本のインフラ」より)

一番最初的高速道路はドイツの「アウトバーン」と言われています。日本より少し面積が小さく、また人口も1億人弱という国です。

古今東西、祖先から受け継がれた価値観は、道路を良くしているということではないでしょうか。道路を悪くして繁栄した国、地域はありますか。古代ローマ帝国が繁栄した要因は、今日という高速道路だと思えます。立派な道路が地中海沿岸に網の目のように張り巡らされ約8万kmもの延長に達していました。この道路によって、各地域で安心して生活が営まれ、各地域間で安心して交流ができるという保障になったのではないのでしょうか。

その政策の一つが「風景」や「観光」などを道路行政の柱にするということ。道路の作り方や利用の仕方、また管理のあり方などを地域と分担し、地域の特性を活かせる道路行政に戻してみたいということです。

で、生き生きとした道や地域、暮らしがさらに良い形で再生できるという信念で皆さんとともに道路行政について考えてみたいと思います。

高速道路ネットワーク(2005年)



日本の高速道路のネットワーク。平成16年度末、高速自動車国道の道路延長は7363km。(出典:「高速道路便覧」より)

一方、日本では1万1520kmという計画がありますが、延長はまだ約7300kmという状況です。全体の計画の6割を超えたところ。8万kmという諸外国の計画からすると、きちんとしたネットワークの形成がむずかしいのではないかと思います。少子高齢化が進み、東南海・南海地震などの防災面から考えても、それぞれの地域で安心して住めるようにするためには、道路ネットワークの整備が急がれるべきでしょう。

が、網の目のように高速道路が作られています。延長は現在1万2000kmという状況です。世界最大の国アメリカでは「インターステートハイウェイ」という高速道路が7万5000km近くあります。アメリカは日本の国土の25倍。都市間を確実に早く結べるという「インターステートハイウェイ」が作られています。現在勢いを増している中国では、十数年前には高速道路は1cm、1mもありませんでした。今では延長2万5000kmくらいになっています。



▲「みち」には「美しく知る」という『美知』や、「未来を知る」と書き「未だ知らず」という意味の『未知』などがあります。

道についてもう少し原点に戻って見つめ直してみると、道というのは「ち」に「み」が付いて神々しい名前となっています。あっちこっちを指す方向を示す「ち」に「み」がついて「みち」。「ち」が交差するところが「巷」といわれる「巷の噂」「巷の賑わい」という言葉が生まれています。巷で道ができ、大きな集落ができ、大きな町ができ、大きな市になったというのが道の文化ではないでしょうか。道に対してはわが国の祖先は畏怖の念を持っていたと言えるかもしれません。旅の無事を祈るということもそうしたことに関わりのあります。また、道には「美しく知る」という意味があります。万葉の時代から沿道などの景観を詠む歌心など、そんなDNAが新しい世紀にも受け継がれ、道づくりにつながっているように思われます。

「未来を知る」というのは「未だ知らず」という意味です。例えば道をつなぐという意味だけでは

道について原点から見つめ直す。時空間から考えて広がる新しい概念。



道の駅 熊野古道中辺路

○「道の駅」の4つの機能



なく、時間の要素を取り入れるという事です。祖先があり過去があるために道があるという考え方が重要なのではないのでしょうか。道というものに時の概念を加えることによって、時空間という考え方をしてみると「みち」という概念がもつともっと広がるでしょう。

道の駅は、東京のテレビやマスコミ、新聞報道などでもとても高く評価されている施策です。道の駅という場所は、道路をただ走るだけではなく休憩し、トイレタイムをとるところです。特に女性のトイレが大きな課題としてあり、トイレがきれいではないという状況も止まっていただけという状況でクリアした施策です。道路情報だけでなくその地域の観光も含めた情報を発信したりもしています。もう一つは、地域との接点や連携を強化している点です。地域の産物を売るような場合は、市町村や第3セクターに整備していただき、私も道路管理者が少しひいた形でその地域が前に出ること

▲「道の駅」は4つの機能に配慮して、現在では全国に830箇所(登録数。うち和歌山県内には17箇所)設置されています。

次「未知普請」です。パブリックとプライベートという公と私是对立概念となりがちですが、そうではないと思います。普請というのは「あまねく請う」ということで、多くの労役・労力を請うということなんです。この未知普請運動で一番簡単な方法は、沿道の植栽をボランティアの方々に応援して植えていただいているという取り組みです。業者に発注するよりも、雑草の生え方が違うということも聞いています。地域の方々の汗、知恵によってきめ細かな道路管理、サービスができるのではないかと思います。



▲清掃活動やクリーン運動、道路の沿道などへの植栽活動など、地域のボランティア団体とともに、全国各地で様々な未知普請活動が行われています。

私も「日本風景街道「シーニックバイウェイ」」というものを思の長い運動にしていきたいと思っています。新しい世紀、新しい時代に根づくような道路行政、国家100年の大計にたった活動・運動にしていく必要があると思っています。

「シーニックバイウェイ」は活動の内容が非常に重要です。様々な事例、活動がありますが、沿道の清掃や標識・看板の整備、パン



▲アメリカユタ州の「シーニックバイウェイ」のルートイメージ。自転車道や駐車場、ビューポイント、散策道、花壇などが広域的に整備・設置されています。

アメリカが発祥の「シーニックバイウェイ」日本でもモデルルートの選定を早期に。

アメリカで屋外の広告規制運動をきっかけとして1978年に「シーニックアメリカ協会」が設立されました。様々な取り組み体制で多様な主体が各地域で参加・活動できることが「シーニックバイウェイ」のキーワードです。アメリカでは1978年にはじまり、アメリカは11年後にできました。その2年後に国家専門委員会が設置され、第1回のルート指定は96年でした。最初の運動から20年近く経過しています。

この活動は「自然・歴史・文化・風景などをテーマとして訪れる人と迎える地域の豊かな交流に、地域コミュニティを再生する」ということで、美しい道路空間の形成が基本方針です。沿道も含め幅広くということなんです。地方部だけでなく都市部も含めて全ての地域が対象です。すでに美しいという道も対象になります。これから美しくしたい、美しくなりたい、美しくなり得るという道も含んでいます。一切の制約はございません。

道には様々な使い方、機能があり、各地域毎にそれぞれの差があり、独自性があるルートや道であってほしいと考えています。

「熊の熊野詣」のみち～熊野古道～



▲紀伊山地～吉野・熊野の歴史の道～。熊野三山へのルートは、紀伊路、中辺路、大辺路、小辺路、伊勢路、北山路、大峯路、十津川路などがありました。

「シーニックバイウェイ」を上上げるための日本の戦略会議は、多種多様な方々に委員をお願いしています。できるだけ早く道づくりにパートナーシップを立ち上げたいと思っています。すでに北海道や九州、またこの紀南地域も本日シンポジウムを開催するほど熱度があがってきています。それぞれの地域の活動を踏まえ、国が前に出るのはなく、後ろに下がってという形が望ましいと思います。4月にはモデルルートを選定させていただきます。20件程度を選定させていただきます。と思っています。

紀南地域は世界遺産として「紀伊山地の霊場と参詣道」が登録され、時至れりというところでしょう。和歌山の情報発信を皆さんが様々な場所に赴き、発信いただくということが非常に重要で、一番PRになると思っています。



▲高野山や湯の峰、川湯、白浜などの温泉地や海水浴場、日本一的那智の滝、橋杭岩など多彩な観光名所が和歌山県内にはあります。

パネルディスカッション

コーディネーター

小田 章氏
(和歌山大学学長)

パネリスト

石田 東生氏
(筑波大学大学院教授)

藤本 多佳子氏
(NPO法人グリーンシーナリー事務局長)

藤本 貴也氏
(国土交通省近畿地方整備局長)

多田 稔子氏
(国近市観光協会連絡協議会会長)



地域の人々が楽しく面白く。
「シーニックバイウェイ」が
根づく秘訣。

第2部のパネルディスカッションでは、小田和歌山大学学長がコーディネーターを務め、4名のパネリストの方々に「シーニックバイウェイ」や地域づくり、まちづくりについて、実際に行われている事例などをもとに様々な角度からお話いただきました。

パネリスト



石田 東生氏

筑波大学大学院教授。大阪府出身。1989年筑波大学社会学系・教授に就任。2005年からは「シーニックバイウェイ戦略会議」委員を業務。

みんなでつくる美しく楽しい道とまち。
おもてなしの心が表れる「シーニックバイウェイ」。

紀南の地には、熊野古道に代表される歴史や文化、海や川、山などの自然、温泉や美味しい食べ物があり、さらに面白い人たちがいます。「シーニックバイウェイ」というのは、地域の人みんなが作



▲アメリカの代表的な「シーニックバイウェイ」の成功事例の「ブルーリッジパークウェイ」には、年間2,000万人の観光客が訪れ、経済効果は2,000億円以上。

る美しい道とまちだと思っています。住んでいる人がやさしくて楽しい国やまちは、景色だけが美しいのではなく、愛情をもってまちをきれいにしているとか、ゴミを拾っているとか、暮らしや活動の気遣いが表れます。風景に気遣いが写り込むので、非常に時間がかかります。

国土の印象というのは、交通路や移動する道路、鉄道などから見える風景で決まってしまうそうです。だから道の力をきちんと受け止める必要があります。地域がしっかりと結びついているということが大切です。

紀南地域での「シーニックバイウェイ」は、紀南地域に属するすべてのコミュニティやグループの人たちが、地域の誇りや歴史・文化を再発見しながら、物語として構成し、それらを来てくれた人たちに伝えたいというプロジェクトだと思っています。

観光に来る人たちは、楽しい思い出、訪れた地でいい思い出を作りたいと思っています。不愉快なことがあってはならないと思いま

す。おもてなしの心が表れていないといけない。それらを提供するのが「シーニックバイウェイ」だろうと考えています。

アメリカの代表的な「シーニックバイウェイ」で非常にうまくいつている事例があります。「ブルーリッジパークウェイ」というところですが、そこには年間2000万人のお客様が来るようになりました。ここに来られた人たちが、そこに滞在される、食事をされる、お土産物を買われる、ガソリンスタンドでガソリンを入れられるというところで、年間22億ドル、2000億円以上の経済効果があります。

紀南の地には、来られる人たちに誇れる一級品がいっぱいあります。歴史・文化・自然、梅や炭、山・川・海の食べ物も豊富です。たくさんありすぎて羨ましいと思うくらいです。ぜひ「ブルーリッジパークウェイ」を目指して、各地域が手に手をとって上手につなげ、お客様に長く滞在してもらう演出を行ってほしいと思います。



▲地域と行政が連携し、美しく活力ある地域環境を創造するための概念図。地域と行政が両輪となり取り組む大切さを説明してくれました。

成功へと導く4つの条件。
「わっしょい」を掛け声に楽しく継続を。

「シーニックバイウェイ」の先進地である北海道を例にあげると、成功する条件が4つあります。1つ目は北海道というイメージのブランド力です。雄大で美しい自然があります。紀南にも熊野古道というオンリーワンなブランド力があります。2つ目は活動的な人たち。北海道にはたくさんおられます。紀南地域も面白い個性豊かな人がいっぱいおられます。3つ目は行政が柔軟に対応してくれる点です。北海道では、前例がないからダメ：と言うことは無しです。顔を合わせながらいっしょに飲み食いしながら作業をすると、自然と変わってきます。4つ目は地域でのコーディネートです。地域での御用聞きで様々なことを相談できる人です。紀南地域に必要なのは、3つ目と4つ目で、成功させるためにはとても重要な要素だと思います。



「シーニックバイウェイ」を成功させる条件などをお話いただきました。

それぞれの地域、あるいはそれぞれのテーマをさらに良いものにしていくために、「わっしょい」という言葉をご提案します。お神輿を担ぐ時やあるいは道普請をする時などの掛け声です。「和を背負う」と書くのですが、和音は3つの異なる音がそれぞれ独自性を発揮しながら全体として調和します。和え物もそうだと思うのです。

楽しくやるのが一番大事なことだと思っています。「わっしょい」という掛け声をかけながら、楽しくみんなで個性を発揮しながら、紀南の「シーニックバイウェイ」をこれから生んで育んでいっていただきたいと思います。

地域で一番の自慢を観光資源に。独自のキャンペーンで地域連携を

パネリスト



藤本 多佳子氏
NPO法人グリーンステーション事務局長。北海道出身。2005年から「新しい冬の富良野・美瑛観光を考える実行委員会」事務局長。

私は北海道富良野市から参りました。北海道で行っている活動をご案内します。まず、大雪・富良野ルート主催の沿道景観フォトコンテストを開催しました。グランプリ作品の「サンピラーの丘」という写真は、市街地から5分程行けばどこでも広がっている風景です。すべてアイスクリームでできているというくらいきれいな風景です。地域で一番自慢できるものが、冬という季節そのものです。マイナス20度から30度という過酷な気象条件は私どもの地域でしか生み出すことのできない風景です。



▲「シーニックバイウェイ」北海道を説明したパンフレットと「シーニックバイウェイみち・沿道景観フォトコンテスト」の受賞作品を切手にして販売した切手シート。

※「シーニックバイウェイみち・沿道景観フォトコンテスト」受賞作品使用



▲作品名「サンピラーの丘」
赤坂義一氏



▲作品名「大地の目覚め」
西田 隆氏



▲作品名「金色の光の道」
古田恵子氏

また、北海道の場合はどこまでもまっすぐに続く道があります。景観の良い道路の一つだと自負しています。

フォトコンテストの終了後、入選作品を記念切手にして発売しました。その売り上げを活動資金にしようという試みで、10枚1シートで2000シートを作成しました。「シーニックバイウェイ」らしいグッズだと喜んでいますが、「じゃあ藤本さん50シート担当」と言われ、売れるかどうか心配だったのですが、「北の国から」の有名なところなので観光協会に持ち込み、「北の国から」グッズの隣に置いてもらったらすぐ売れてしまいました。

また、語呂合わせで5月30日を「ゴミゼロ」と読ませ、ゴミ拾いのキャンペーンを行いました。先頭には騎馬隊に歩いてもらいデモンストレーションしました。沿道の花植えもボランティアでやっていたいただいています。



▲騎馬隊がデモンストレーションで歩いた「ゴミゼロキャンペーン」の様子。

▼沿道に様々なきれいな花を植えるボランティア活動の様様。



コミュニケーションを密にすること。具体例を積み上げて方向性を導き活動。

北国の生活体験というのは、観光資源としてとても大きな価値を持っています。同時に観光客の冬の落ち込みというのは、地域経済にダイレクトに響いてきます。大雪・富良野ルートは年間700万人のお客様が来られるのですが、そのほとんどが夏のラベンダーの観光です。3割ぐらいが冬のお客様です。夏も冬も本当に通過型のお客様ばかりです。調べてみると

ほとんど地元にはお金が落ちていないという状況でした。だから様々なキャンペーンを通じて、少しでも長く滞在し、地元にお金を落とすてもらおうと色々な試みを行ってきました。異なる6つの市町村が集まって初めて行ったキャンペーンでした。

それ以前は、富良野市を含め周辺の各市町村単位では、これ以上地域づくりの活性化が行えないというギリギリのところまで来ていました。だから「シーニックバイウェイ」に頼らなくても、何らかの形で広域連携というのはやらなければならぬと思っていました。もともとそういう強い意思がないと「シーニックバイウェイ」もなかなか成功はしないでしょう。

取り組み方も様々な試行錯誤があつていいと思います。コミュニケーションを図ることによって、参加団体の方々の顔がどんどん見えてきます。行政の方々の顔も。具体的な事例を一つ一つこなし、たくさん積み上げることによって、やっと方向性が見えて、各市町村の中でも参加団体の中でも、代表者の考えがしっかりと見えた時に、はじめて動き出しました。

紀南地域は北海道と条件もテーマも違います。違うからこそお互いに利用できるアイデアや手法があると思います。一日も早く、紀南地域のより具体的にオリジナル



▶北海道での成功事例やコミュニケーションの大切さを語っていただきました。

な活動の情報が、入ってくればいいなと思います。

そのような情報や活動状況などを常にとりあえるような関係性を保っていきたいと思っています。紀南地域は気候がとても暖かくもつといたい気になります。凛としたさわやかさが北海道富良野市にはありますので、ぜひ皆さんお越しください。

近畿の景気の推進役が紀伊半島。広域の交通ネットワークを早期に整備。

パネリスト



藤本 貴也氏
近畿地方整備局長。1972年建設省入省。2004年より現職。

近畿地方はここ1年くらいで急激に景気が良くなって、元気になってきたと思います。この状況を定着させていかなければなりません。その推進役が世界遺産に登録された紀伊半島地域です。世界遺産の登録によって、地元地域の皆さんが紀伊半島の魅力を再発見されたのではないのでしょうか。この気運を高めるための手段が「シーニックバイウェイ」だと思います。

紀伊半島周辺の交通ネットワークについて説明します。大阪から紀伊半島を通って串本、そして名古屋へといたる道。串本から大阪が約245km、串本から名古屋が約320km。合わせると約560km余りです。東京から大阪の距離が約520km。紀伊半島から名古屋まではかなり長い距離があるということです。それをつなぐために今、高速のネットワークを作ろうとしています。

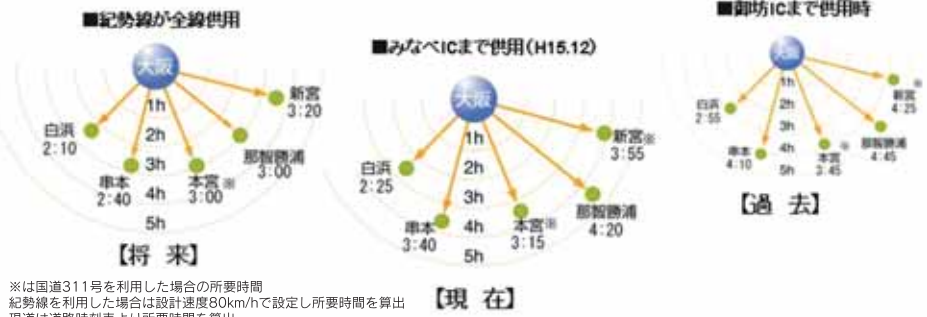


▲世界遺産に登録された「紀伊山地の霊場と参詣道」は、和歌山県、奈良県、三重県にわたる熊野三山、高野山、吉野、大峰の三霊場と参詣道で構成されています。

先だつての国土開発幹線自動車道建設会議において、新しい整備手法「新直轄方式」で田辺から白浜間の14kmが具体的に着手することになりました。先端的那智勝浦道路の約9kmもあと2年後くらいには開通します。部分的な開通ではありますが、これをいかに早く整備していくかが課題であり、現在の紀伊半島の弱点だと言えます。

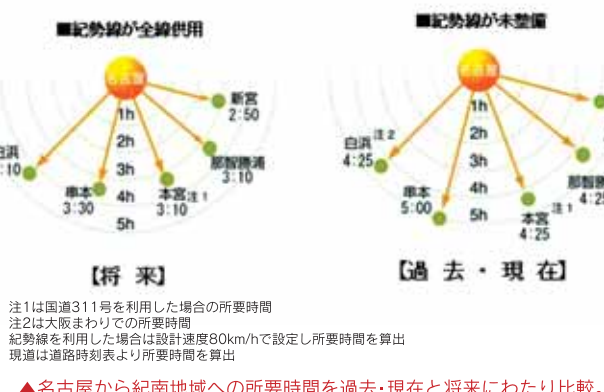
もう一つの弱点は地震の問題です。東南海・南海地震が30年以内に5割または6割の確率で発生するという事です。地震以上に恐ろしいのが津波です。串本の先端では場合によれば8m以上の津波が発生する恐れがあります。津波によって紀伊半島の外周である国道42号が水に浸かると、安心して観光客が来ることができないという話があります。

高速道路は当然津波より高いところを通っていますので、救援も



風景、景観を軸に地域おこしを。持続力が大切になる「シーニックバイウェイ」。

のオンリーワンを発見、発掘し、そして育て発信していく。そんな活動に持続的に参画し、その後押しをするのが行政の役割です。「シーニックバイウェイ」の一番大切なところではないでしょうか。



がとても重要だと分かります。そのようなインフラ整備を地域整備にどのような結びつけていくかが大切です。「シーニックバイウェイ」は決して良い景色をつくることではありません。地域おこしの活動そのものが「シーニックバイウェイ」だと思っています。その土地の自然と歴史、それによって育まれてきた文化、それによって花の咲いた風土、風景、地域



▶「シーニックバイウェイ」活動の行政の役割や重要性をお話しました。

パネリスト



多田 稔子氏
田辺市観光協会連絡協議会会長。和歌山県出身。和歌山大学教育学部卒業。2005年より現職。



▲日本一の梅の産地、紀南地域には美しい梅林風景が初冬に広がります。



▲日本のナショナルトラスト運動の発祥地「天神崎」。

「シーニックバイウェイ」ということを勉強すればするほど、非常に間口の広い事業だと感じています。田辺市が昨年5月に合併して近畿地方で一番面積の大きな市になりました。そういうところからも紀南地域には良い風景がたくさんあり、多彩な顔をもつ景色があります。

「シーニックバイウェイ」という事業を活用して、どのように地域と地域をつなげていくのか、どのように維持していくのかが課題だと思います。一つにつな

いる道、道路という概念を取り入れながら、地域間の活動も一つにつなげていくということが、新しい地域のあり方であるような気がします。

世界遺産に登録された一つの価値の中に「文化的景観」ということがあります。自然遺産でも文化遺産でもなく、人間が長い年月をかけてきた営みの中で、暮らしとか風景が融合した遺産だと解釈しています。そういう認定を受けているので、私たちの地域は暮らしがそのものが価値あるものだと思っています。そういう価値観をもって「シーニックバイウェイ」というものを紀南地域で活用していければと思います。

そして、紀南らしさとは何なのかということ、住んでいる私たち自身がまず再認識する必要がある。皆さんで再認識し共有していく必要があるのではないのでしょうか。

道路という概念を取り入れ地域を二つに「シーニックバイウェイ」は新しい地域のあり方。

国、県、市町村、そして民間が連携。全員が一つの舞台で考え取り組む。

他のパネリストの方々の話をお伺いすると「シーニックバイウェイ」に取り掛かるための素地は、この紀南地域にはあるように感じました。石田先生の成功する4つの条件、それからギリギリの状態でもまちづくりに取り組んでいかなければいけない。どれもこれもこの地域にあてはまることだと思えます。

民間の立場では、道路というのは国、県、市町村と管轄が3つあります。この3つがあるからこそ三者が委員会を組織し、そこに民間も加わる。住民からとればこれが一番ありがたいなと思います。行政というが一番身近なのが市町村です。ただ、市町村だけではじ



▼熊野古道中辺路街道にある「牛馬童子」。



▲熊野古道はいにしえより参詣道として庶民から貴族まで多くの人々が熊野を目指して歩きました。

▼熊野古道中辺路街道から見える高原地区の美しい田園風景。



▲田辺市内には古き良き街並みが今も残っています。



▶紀南地域での「シーニックバイウェイ」運動の可能性をお話いただきました。



▲田辺市本宮の熊野本宮大社。



▲熊野那智大社・青岸渡寺へと続く大門坂。

地域の再生や振興に大学も関わる。いまづくり・地域づくりをいっしょに。

コーディネーター

小田 章氏
和歌山大学学長。
大阪府出身。1971年和歌山大学経済学部へ赴任。2002年より現職。

1978年にアメリカではじまった「シーニックバイウェイ」という運動は、「シーニック」という景色が良い、景観が良いという言葉です。また「バイウェイ」というのは寄り道や脇道という意味を持っています。基本的に道路から見ると景色だけではなく、その周辺地域全体の景観を道に軸にして考えていこうという意味です。

この「シーニックバイウェイ」運動は、石田先生のお話からすると、地域の人も含めて様々な人があるように絡み、連携するかなによって、運動自体が生きるか死ぬかが決まるということです。紀南地域の担い手となる多田会長には、一

級品のものが多くある北海道とは違ったこの地域で、北海道に追いつけ追い越せということを、行政のバックアップも利用しながら目指していただきたいと思います。

和歌山大学では現在、田辺市に「紀南サテライト」という場を作っており、この場は、県の人も地域の人も色々な人が入って、様々なことを話し合う場として作り出した。大学の一つの役割として、地域再生、地域振興に関わるということが、国の政策としても言われています。ぜひ「紀南サテライト」という場を利用して、活発な議論をしていただければと思います。

「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されたのが一昨年です。リピーターのお客様も徐々に少なくなってきたということとです。一過性のものになるのを克服するためにも、危機的な状況にあるということを認識して、皆さん一生懸命活動されています。様々な状況を鑑みると、私自身



▶コーディネーターを務めていただいた小田学長。

「協争（きょうそう）」というのが必要であると考えています。コンペティション、つまり競い合う「競争」ではなく、時には協力し合い、時には同じく競い合うということがなければ、お互いが伸びないのではないかと。そういう意味では、紀南地域と北海道は、紀南は後から追いかけることになるのでしようが、「協争」という関係で、情報交換をしながら助け合っただけだと思っています。

和歌山大学も和歌山の地にある大学ですので、ぜひ色々な形で皆さんとともにこの課題を乗り越えるために、いっしょに頑張ってください。



▲田辺市田鶴交差点で植栽のボランティア活動を行う方々。

歓迎の歌

田辺市立田辺第三小学校

基調講演の後、田辺市立田辺第三小学校合唱部の児童の皆さんが、「歓迎の歌」と題して合唱を披露してくれました。約50名の児童の澄んできれいな歌声が会場を包み込み、訪れた来場者を和ませてくれました。



▲きれいなハーモニーを聞かせてくれた田辺市立田辺第三小学校の児童の皆さん。



▲合唱の音が会場を包み、熱心に耳を傾ける来場者。

第3部 交流会

第2部のパネルディスカッションの後、会場を田辺地域職業訓練センターに変え、各ボランティアグループのメンバーやポスターセッションの参加者、シンポジウムの来場者が参加し交流会が行われました。また「紀州弁慶伝説保存会」のメンバーが、弁慶や山伏などの、当時の衣装に身を包み会場を盛り上げてくれました。



▲当時の衣装に身を包んで会場を盛り上げてくれた「紀州弁慶伝説保存会」のメンバー。▲和歌山大学の小田学長にご挨拶いただきました。

ポスターセッション表彰式

シンポジウムのはじまる前に、日頃の活動の内容などをPRするポスターセッションが行われました。来場者の投票により、以下の5団体が賞を授与されました。



シーニックバイウェイ賞に選ばれた「グランドデザイン那智勝浦」。



◀みちぶしん賞には「NPO法人 花つぼみ」が選ばれました。

カントリーチャレンジ賞を受賞した「田辺観光ボランティアガイドの会」。



◀「和歌山県地球温暖化防止活動推進センター紀南支部」ががんばって賞を受賞しました。

まちづくり賞に「ピオトープ切目川」が選ばれました。おめでとうございます。

どんな活動が対象になるのですか？

例えばこんな活動です…

- 風景の良い場所づくり、花づくり、清掃活動
- 観光ルートづくりやツアー、イベント開催
- 地域の特産品づくり
- 来訪者の案内や飲食などのサービス提供
- 地域情報の発信 など

海、川、山や古いまちなどの美しい風景を、もっと沢山のの人に楽しんでもらいたいね。

隣の地域や違う団体と一緒にまちづくりができないかなあ。

世界遺産に登録されたけれど、もっと地域の活性化に活かせないかなあ。

看板やゴミの放置などが風景を台無しにしているの、何とかしたいなあ。



▲迫力ある生演奏と歌、そして演技。来場者も大満足の講演でした。

みちぶしん

ミュージカル「カントリーチャレンジャー」18時30分からは田辺市紀南文化会館大ホールにおいて、ふるさとキャラバンによるみちぶしんミュージカル「カントリーチャレンジャー」が上演されました。

紀南地域で進めるシーニックバイウェイのイメージ

世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に登録された紀南地域は、美しい風景と長い歴史が培ってきた文化や生活が豊かな地域です。一方、道は、地域のくらしを守り、来訪者を運ぶ大切な社会基盤ですが、これも地域の魅力のひとつとすることができます。感動的な景色が楽しめる道が続き、周りには楽しい場所や地域の人との出会いがある。車を停めて歩いても楽しく、また訪れたいと思わせる道を皆さんと協働してつくりたいと思います。

シーニックバイウェイに取り組みませんか？

主催 シーニックバイウェイ紀南シンポジウム実行委員会
TEL 0739-22-4564 (シーニックバイウェイ紀南シンポジウム実行委員会事務局)

協力 和歌山県・田辺市・上富田町・白浜町・国土交通省 紀南河川国道事務所

平成18年3月発行

●表紙・P5・P6 写真提供：田辺市観光協会連絡協議会